

トポスにおける発達

第 11 回

—幼稚園のコーナーという場所—

無 藤 隆

無藤（一九九六）は、保育の中で子どもが獲得するはずの認識を「身体知」と呼び、身近な環境における対象に対する多様な身体的関わりの方を習得するものであるとした。また、その獲得の際に、具体的幼稚園内の個々の特定の場所が持つ特性が重要であり、その場所に対する一種の適応（しかし多様性をもった）としても捉えたと指摘した（本連載）。ここでは、おそらく単に特定の場所にある物を使えるようになることを越えて、様々な使い方や関わり方をいろいろな子どもが持ち込み、互いの新たな混交が生じ、時に揺らいだり発展したりもするだろう。

ここでは、保育における活動において、特定の場所が持つ働き、またそこでいかにして新たな活動が生成していくのかを取り出したい。そこから幼稚園における環境が複数の場所から成っているとして、その場所がどのような特質を持つのかを解明したい。

製作コーナーの活動とは

製作コーナーの活動とはどのようなものであろうか。いかに製作しているのか。他の類似の活動はそこに紛れ込んでくるのだろうか。

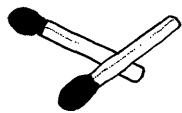
年中児の保育例を見てみよう。観察した幼稚園ではこの頃、お面を作っただけで遊ぶことが盛んであった。お面の図柄は自分で案は出すものの、ほとんどが先生に描いてもらう。それを子どもがクレヨンで色塗りをし、ハサミで切り抜く。まだハサミがうまく使えないで先生に励まされる子どももいる。切り抜いた後は、先生に輪を頭に合わせて作ってもらいお面にしてもらう。

この場面で、先生と、M、J、K4、A3、Y2、D、K5、R3、Y3、K、H2、H、などがお面の製作に携わっており、途中でY5、Tが加わる。先生はMのお面作りを終え、Mに手渡す。Mはそれまで先生が自分のお面を作ってくれる様子をそばで見ているが、受け取った後、棚のところへ移動する。その時、

Y2は、自分では切れないことを先生に訴える。先生に励まされ、泣きそうな声を出しながらも席に戻り、続きを切ろうとしている。

先生はすぐにA3のお面作りに入る。Dがそこに来て、先生に何か話しており、その様子をA3はじっと見ている。その他、先生は、Y5、T、K4、等と関わっている。その一方で、机では、H2がお面の色塗りをしており、Y3は立って切っている。R3はY3の様子を見ていたが、K5が誘いに来て、ままとコーナーに移動する。Tはお面を作りたいと言って机に近づいてくる。K3は切り抜いたものを持って先生のそばにいる。Kは机と先生の間をうろうろし、Y2の横にあったクレヨンを取って、席につく。Jは切り抜きの破れたところをテープで貼り、先生に見せに行く。

ここでは、お面作りを中心として活動が成り立ち、各々の子どももその一端を行っていることは確かであ



る。その意味で、同じ活動を並行していると言っている。だが同時に、各々の行っていることはお面作りの行程の様々な部分であり、バラバラである。これからお面を作る子どもから、作り終えた子どもまでいる。また、うまく出来ないところを先生にやってもらうにせよ、それもまた様々な部分を補助してもらっている。さらに、お面作りに関わってかどうか、先生とおしゃべりが主になっている場合もある。子ども同士のもの貸し借りや提供以上の協力活動はあまり見られないが、互いの活動や先生が補助している様子を見ることがしばしばなされる。

要するに、お面を作るということ、そして、お面作りに関連する材料をめぐって、一人一人の活動が並行している。その並行の時間的ずれは大きく、すべての行程の部分が同時的に行われている。それを眺める子どもにとっては、どの部分にせよ、その見本を見ることができるとも言える。保育者は、絶えず、子どもの求めに応じ、時に手伝い、時にそちらをみてうなず

く。特定のことは手伝い特定のことを手伝わないといったことではなく、子どもの必要性に応じて判断しているようである。結局、お面という物、お面を作るという活動が、子どもの間を、また子どもと保育者の間をつないでいる。それはさらに具体的には、机に向かい、素材や道具を用いるという一連の行為からなることである。

製作から別の活動へ

一人の子どもの製作コーナーでのお面作りから他の活動へと移行するまでを見て、製作の活動の持つ意味を検討したい。

年中児Yがお面を作り、お面をかぶってRと遊びに行くまでの流れである。Rが先に登園してお面の色塗りをしているのを見て、自分も作ると言って席につく。図柄を選ぶために本を持ってくるが、Rがのぞき込んできて会話が始まる。その内に、Rは自分のお面の色塗りに戻り、Yは一人で本を見始める。先生に

「お面を作りたい」と伝えるが、先生はコーナーの机を増やしているところでは応じられない。その後、Yは外に視線を映し、Hが登園したことを見つけ知らせる。また本を見て、先生に作りたいものを示す。先生はYに気づき、言葉は掛けているが、机の上の整理をしている。Yは本を替えに行った後、またRと話し始める。「違うのにする、これRちゃんの……」こう言った後、また図柄選びが始まる。Y2がクレヨンを取ろうとしているのに気づき、届くところに動かしてやる。そこでY2の絵に興味を持ち、助言をする。また本を見るが、ときどき先生のやり取りや、ままごとコーナーも見ている。しばらく見た後、先生に描いてもらいたい図柄を示すが、RやNと会話を始め、その後また迷い始める。突然、「あっ、いいこと考えた」と言い、先生に決めた絵を見せる。Nがハサミに手が届かないと言っているのを聞き、Nへハサミを渡してやる。その後、Yは先生の近くに行き、絵を描いてもらい、席に戻って色塗りをする。先生にお面にしても

らって、Rと室外に遊びに行く。

おおむね、お面作りの絵をどうするかを考えたり、描いたり、先生に描いてもらおうとしているのであるが、間で様々なことをしている。多くはその場で見聞きしたことへの連想からの発言や行動である。まわりの子どもの言動に疑問を出す（「何ですか？」。子どもの登園を見つけ知らせる（「Hくんきました」）。本の内容にコメントする（「ブルートレインの方が速いんだよ」など）。友だちにクレヨンを取ってやる（「何？」）。絵に助言する（「違うよ、そんなの。黒と水……白で塗ればいいんだよ」）。机のそばに入れないA2にからかいめいたことを言う（「Aちゃん入れませーん」）。友の言うことをからかう（Nが「かぶと虫大好き」と先生に言ったのに「嫌いって聞こえた、Nくん」）。友としゃべる（「ぼく、ギャラクシーシールも買ったよ」）。ハサミを取ってやる。友に電車を描いたらと助言する（「K2、これ描きたいだろ」）。友を机の下からくすぐる。

そういった余分なことをしながら、お面を作るとい
う活動は完成させている。初めにクレヨンを取り、
「僕も作るんだあい」と宣言する。本を取ってきてお
そらくどういふ図柄にするかの参考にする。先生に
「ねえ先生、お面」と作ってもらうよう頼む。先生は
別なことで忙しく無視する。本を見て「ねえ先生、こ
れ作りたい。れんごう車」と先生に言うと、先生は
「れんごう車？ どれ？」と見る。別な本を持ってき
て、「ねえ、このやつ描いて。先生これ」と言うと先
生はYをちらっと見る。Rと会話して、「どれにしよう
か」と言う。再び本を見て「何にしようかな」と言
う。先生に本を見せて「ね、これ。遠いところまで行
くの」と言うと、先生は「はい、どれ？ それ……ね
え。遠いところまで行くの？」と相づちを打つ。「ね
え新幹線、この……」とまた先生に言うと、先生は
「うんちょっと待ってて」と応ずる。また本を見なが
ら「どれにしよう」とつぶやく。そうしている内に、
「あ、いいこと考えた。これにしよう」と本を指し、

「先生、これにしたよ。ね、ね、ね、先生、これ
にした」と先生に言い、先生は「はいはい」と受け
る。少しして、再び、「ねえ、先生、先生、先生、先
生」と本を持って先生のところに行く。今度は、先
生はYのお面の絵を描く。その絵に色塗りをする。ハ
サミを取り切る。ゴミを拾い、籠に入れる。また切
る。ちょうど外から戻ってきた先生に、「先生できま
した」と持って行き、見せる。はさみやクレヨンをし
まう。先生はYのお面を完成する。先生がYにお面を
かぶせる。「あのね、これとね、Rちゃんとね、僕の
ね。仲間なんだよ」と先生に言う。「行ってこよう
ぜ」とRと外に行く。

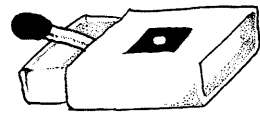
このお面作りの主な流れは簡単である。絵を本から
選んで、先生に描いてもらい、自分で色塗りをして、
ハサミで切り取る。輪にするなどを先生にやってもら
いかぶせてもらう。長く掛かったのは、絵を選ぶのに
迷っていることと、先生が他の子ども・仕事にかまけ
ていることが多かったことよっていているだろう（先生

はあるいはYが迷っていることを見て取ってすぐには対応しなかったのかも知れない)。Yも本当にこれだという確信が出来るまでは先生に執拗には頼んでいない。「いいこと考えた」と決まっただけからの頼み方の執拗さとそれ以前のあきらめのよさとは対照的である。絵が決まって先生に描いてもらってから比較的其他の行為が混じらずに完成に向かっている。

このように、お面作りを行う過程を自分のお面作りに直接関係する行為とそうでない行為に分けてみると、子どもがその両方を混ぜ合わせながらやっていることが分かる。さらに、様々なまわりの子どもの様子を見るだけのことを含めれば、もっと混じっている度合いは大きい、絵が決まっただけでも、脱線めいたことをしている。だが、同時に、そのように脱線しながらも、お面作りということからまったく外れてしまうことはないように見える。お面作りのコーナーにほぼずつといるのだし、外れていると言っても、多くはそれに関連しての他の子どもの活動への注目やコメント

であり、また参考になっている本からの連想である。また、そのコーナーから見えたり・聞いたりすることに対応する範囲のことである。何より、お面作りをまわりの子どももやっており、材料や道具があり、自らの参考にするための本があり、といったことにも支えられているだろう。また、お面作りの主な行為を保育者にやらせようという習慣が活動のポイントとなるところをはっきりとさせ、同時に、待ち時間を増やしていることも明らかである。

以上、特定の場所にふさわしい活動を行う中で、しかし同時に、その活動を決定的にダメにすることはない程度の外れ方をしつつ、メインの活動に戻る様子が示された。身近な環境要素（机や道具や素材また他の子どもや保育者の活動）とそれが日頃使われている仕方から来る期待が複合しつつ、特定の活動の維持を支



えていることが分かる。同時に、活動が一直線で進むのではなく、そのまわりで揺れを示しながら、メインとなる活動に戻る形で進んでいることが分かる。その揺れの中に、まわりの友だちとの親しみをもった交渉とか、助言・助力とかが生じている。また逆に、自分のメインの活動の参考になる情報を得ているようにも思える。あるいは、最終的に自分の作るものを決めたときの確信の強さを支えているのかもしれない。

作品の発展の様子

製作コーナーでの活動の発展の仕方の一つの例でやや詳しく追ってみよう。揺れながらも、流れの中から一つの作品が結実していく様子を見て取ることが出来る。

年長児Tは、Jと一緒に先生から紙をもらい、ハサミで切り始める。S2が片付けに来るのに、片づけないように言う。S2は自分の作品をJに見せようとする。それをちらっと見て、自分の作ろうとしているも

のを独り言のように言っている。厚紙を切っているときにJから「これちょっととき、そのまんま出来ないよね」と作品について相談を受ける。しばらく会話が交わされた後、ジェット機以外にいろいろな紙でロボットも作る、と言う。さらに、笛を吹きながらTの作品をのぞぎに来たMと、今日遊べるかどうかのやり取りをした後、Mの「これ船でしよう?」という質問に「これジェット機」と答える。そこで、「乗ったことないけどね、お友だちんちでね、見たことある」と自分の経験を話している。しばらくTの様子を見た後、MはTの作品に助言する。初めはMの言うことを聞いて、その通りにしようとしたが、途中でMが作品の一部に手を出したのをきっかけとして、自分なりの考えを伝え、通す。Mも「なんだ、そう貼るのか」とTがテープを貼るのを見ている。その後、色を塗り、テープで貼る。Jと相談しつつ、JとTの作品を合わせようとする。てんとう虫を見に行ったりしながら、作品を作り続ける。

明らかにTはこのコーナーで自分の作品を作ることが出来た。だが、その経過を辿ると、単にそこにある素材と道具ですんなりと作っているわけではない。様々な中断や迷いがあり、それが時に何を作るかに影響している。もう一度何を作っているかという点で流れを整理してみよう。その発言を見てみる。

最初に紙を持って、「あつ、トレーラー作ろう、僕」と言う。三角の切れ端を二つ持ってくつつけて「ヨットになったぞ」とする。「僕はね、忍者デストロンみたいに作るのだ」「シックジェットみたいな作るんだ」と言う。「ロボットだね、いろんなかたい紙で作んの」「シックシヨット作るからね」と言う。「これがジェット機」と答える。これらは、何を作るかのイメージを語っている。結局、ロケットらしきものを作ることになる。

また、作業の方法からどうするかを述べる場合がある。「いろんなのテープで貼りつけていくの、なあ」と言う。「切っちゃえばいいんだよね。ちっちゃく

ね」「あ、こつちを切っちゃえばいいんだよ」。「色は、僕ー、黄色、オレンジにしよう」。「やっぱりこつちに合わせない?」。「あつそうだ。ここ切る、ここ」。また、もちろん、作業としては、紙を切り、並べ、貼る。線を引く。色を塗る、などをしている。

さらに、友との会話の内容が関連することがある。

Jが「僕ジェット機作る」と言った。S2が「僕、こんなふうで作ってるよ、Jくん、見てごらん」と言った。JがTと作品について相談する。Mが来て「これ船でしょ」と尋ねる。Mが切ることにについて助言する。Jが「おかしい? これこんなふうにするの」と作品についてコメントする。JがTの作品をのぞき、取って切ろうとする。Yが「何作ってるの?」と尋ねる。Yが「Jくん人間作ろうよ」と言う。こういった発言はおそらくその後のTの行動に影響し、作品作りにも多少とも変更を加えることになっている。

最後に、作品を使って遊ぶことがある。てんとう虫が見つかったので、作品のジェット機を「発進」さ

せ、てんとう虫を乗せさせる。乗せさせる前に、そのつもりで「ジェット機」を加工している。

何が決定的な動機かは分らないが、最小限、この作品が出来るにあたり、初めからのTの心づもりと共に、友だちとの会話が影響しているに違いない。また、作業する行為自体が作品を自ずと作り替えてもいるだろう。コーナーが持っている素材と道具から可能となる行為可能性と、友とのやり取りの中で現れてくる特定の幅の作品の可能性の交差する中で、いわゆるイメージとか目標が生まれているように思える。少なくともこのコーナーに来る前から明確な目標を持っているとは思えない。初めに「僕も何か作る」と言っていることでもそう思える。ハサミで切り始めて、「あっ、トレーラー作ろう」と言うのだし、次に三角形を合わせて「ヨット」と言うのである。もちろん、テレビ番組のキャラクターが途中で思い起こされるようであるから、それもまた影響しているであろう。

最終的な作品はこの長いエピソードの流れの中で新た

に出現してくるものだとということが重要なことである。とりわけ、てんとう虫のエピソードは偶然に生じたものであり、それを作品作りに取り入れたのであるから、余計に、「創発的」なのである。

なお、片づけとか、今日遊ぶかどうか、キョンシー遊びとか、ままごと遊びとの境の争いとか、てんとう虫とかは偶発的なこととしてこの活動に入り込んでいく。各々、簡単に処理して、作品作りに戻っている。てんとう虫だけは今見たように作品作りに取り込まれる。外からの攪乱に揺れながらも作品作りは進行するのである。

(お茶の水女子大学)